

JACROW #20

ざくろのような

脚本 中村暢明

登場人物

○山東電機 次世代電池事業部

野間敏也（38）

リーダー

薦賢一（38）

サブリーダー

中野豊（42）

副部長

鈴木朱美（39）

副部長

広重樹生（47）

部長

大下由麻（28）

社員

○松川電器 人事部

山崎真矢（40）

室長

宇部大悟（35）

課長

○海米（ハイミ）

張軍（チャン・ジュン）（47）

雷瑞敏（レイ・ルエミン）（42）

○他

益子かおり（28）

スカウト

野間典子（38）

妻

スタッフ

伝統ある大企業の【オフィス】がメイン舞台。
その他、【ラウンジ】のエリア。

【オフィス】

山東電機次世代電池事業部のフリースペース。
個人ワークにもミーティングにも使用する。

【ラウンジ】

東急ホテルクラスのカフェラウンジ。

【シーン0 オフィス】 金曜日

3月のとある金曜日。

広重は長い定規を手に悩んでいる。超真剣。

中野も何やら考え込んでいる感じ。

朱美は2人を黙って見ている。

野間は机に向かって何やら仕事をしている。

緊張感がしばし続いた後、重い口を開く。

広重「うーん、なんだか・・・なんですか？」

中野「私の考えを言っていていいですか？」

広重「もちろん。言ってください」

中野「・・・バックスイングがアウトから入りすぎなんじゃないですか」

広重「バックスイング？」

中野「（ゴルフスイングしながら）クラブがアウトからインに抜けるとスライスしますから」

朱美は呆れて帰り支度を始める。

広重「なるほど。その視点はなかったです。バックスイングね。(スイングしながら) ってことはもう少しこっちに振るってことですか？」

中野「いやいやまだ引いて大丈夫ですよ・・・ああそのくらいでいいんじゃないですか。で、トップから思いっきり腰を回していく感じで振ってください」

広重、フルスイング。

中野「ナイスシヨです」

広重「なるほどこういうことか」

中野「基本はあくまでインアウトインですから」

広重「中野副部長、ナイスアドバイス。最近、ドライバーのスライス病が直んかったんですよ。明日のコンペ、今の感じでトライしてみます」

中野「頑張ってください」

広重「ええ」

朱美「広重部長」

広重「ん？」

朱美「タイタニックって観ました？」

広重「タイタニック？映画の？ディカプリオですか？」

朱美「そうです。観てますよね？」

広重「鈴木副部長、(自慢げに) 私に映画のことを聞きますか？」

中野「広重部長、相当映画観てますもんね」

広重「(朱美に) 大体タイタニック観てない人なんかいないでしょ」

中野「あ、すみません」

広重「(吃驚) え？」

朱美「タイタニックが氷山にぶつかって沈むとき、それでものんびりしてる乗組員いたじゃないですか」

広重「ああ、まあそういう細かいとこ覚えてないけど。いたかもしれないね」

朱美「事の重大さを？理解できなかったんでしょね。その乗組員の人たち」

広重「まあそうですね。わかりますよ。彼らの気持ち」

朱美「やっぱり」

広重「誰だって沈むと思いませんよ。あんな馬鹿デカイ客船。それがどうしたんですか？」

朱美「いえ、昨日、DVD観て、なんか妙にそのシーンが頭に残ったんですよ」

広重「え？そこ？(笑) あの映画はそこじゃないでしょ」

朱美「はい。でも私だったらどうするかなんて思っちゃったんです」

広重「どうって？」

中野「(笑) 真っ先に逃げんじやないの？」

朱美「そういうのもありますね」

中野「それは無責任だろ」

広重「で、それがなんなんですか？」

朱美「あいや特には。すみません。じゃあお先に失礼します」

広重「お疲れさま」

中野「お疲れさん」

朱美「野間リーダー、大日化成の請求書、あなたのデスクに置いてくわね」

野間「大日化成？」

朱美「水酸化ナトリウム購入したでしょ？」

野間「そうでした」

朱美「じゃあとよろしくね」

野間「お疲れ様です」

朱美、退社する。

広重「中野副部長」

中野「はい」

広重「タイタニックは観た方がいいですよ」

中野「あ、あはい」

広重、帰り支度を始める。

そこに薦が入ってくる。

出張帰りらしく、トランクを引きずりながら。

笑顔がない。なんだか戸惑った表情。

広重「お帰り」

薦「ただいまです」

中野「どうだった？PM2.5」

薦「相変わらずですよ。それより今、ここに来る途中、聞いたんですけど・・・来週、松川の間人さんが来るって本当ですか？」

広重「今朝の部会でみんなには伝えたんですが、松川電器のプロジェクト担当が我々と話をしたいそうです」

薦「・・・リストラですか？」

中野「馬鹿言っちゃいかんよ。社長も言ったら。松川電器と提携するって言っても、山東電機の上場とブランドは維持されるって。つまり松川は、金は出すが、口は出さないって言うてくれたんだ」

薦「普通逆ですよ？そんな虫のいい話があるってホントに思ってるんですか？」

中野「うちは天下のSANTOだぞ。確かに今は苦しいけど、我々には世界一の技術がある。薦サブリーダーもわかってると思うが、ここで開発されたりチウムイオンバッテリーが世界中の電気自動車に搭載される日も近い。松川もそれがわかってるから助けてくれたんだ。その心臓部であるこの部署を、我々をどうにかするわけないだろ。ですよね？部長」

広重「その通り。仮に何か言われたとしても私らが守りますから、君たちは何も心配しなくていいです。とにかく今は野間リーダーに従って世界最小の車載バッテリーの開発に邁進してください。いいですね？」

薦「・・・わかりました」

広重「それじゃ私はこれで失礼します」

薦「お疲れ様でした」

中野「明日、（軽くスイング）頑張ってください」

広重「ありがとう」

中野「お疲れ様です」

広重、退社する。

中野も帰り支度を始める。

薦「ホントに口は出さないって思いますか？」

中野「まあ出さだろうな」

薦「え？だってさっき」

中野「広重部長がああ言ったんだ。そう言わざるを得んだろ」

薦「・・・」

中野「TOBで我が社の株50.2%が松川に買われることになった。親は子供に言うことを聞かせるもんだ」

薦「放任主義の親もいます」

中野「松川さんはどっちだろうね。じゃあお先」

薦「お疲れ様です」

中野、立ち止まり、野間をチラリと見る。

が、何も言わずそのまま退社する。

薦、野間に近寄り、

薦「野間はどう思うんだよ？」

野間「何がだよ？」

薦「松川の言いなりになるのかってことだ」

しばし間。

野間「俺は別にどっちでもいいよ」

薦「出た。すぐそれだ」

野間「は？」

薦「いっつもお前は我関せずだ。新入社員ん時から」

野間「そうか？」

薦「そうだ。いっつもお前はそうだ」

野間「なに熱くなってるんだよ」

薦「いや。なってねえよ・・・あいやなってるか」

野間「俺は山東が松川グループになろうがなるまいが、どっちでもいいよ。リオン電池の開発さえできればそれでいい。

世界最小量産型車載電池の開発が俺の夢だ。松川だって馬鹿じゃない。今の時代、リオンを手放すわけがない」

薦「まさりやそうだ」

野間「だろ。だったら経営が変わろうが、俺たちがやることは変わらない」

薦「松川も天才野間敏也を手放すわけがないしな。どっちにしろ安泰ってことだ」

野間「何言ってるんだよ」

薦「何って現実だよ」

野間「現実？」

薦「・・・あいや何でもない。忘れてくれ」

野間「は？なんだそりゃ」

薦「ごめん」

野間「言っとくがリオン電池の開発は薦の助けが必要だ。っていうか薦じゃなきゃできない。俺ひとりじゃ何もできん」

薦「わかってるよ。リーダーを支えるのがサブリーダーの仕事だ」

野間「トゲがあるな」

薦「ないよ」

野間「・・・あつちはどうだったんだよ？」

薦「中国？ああまあすごかったよ」

野間「すごいつてなにが？」

薦「ひと言で言えばエネルギーかな。活力？バイタリティ？とにかくあの執念はすさまじいな。会社も人も」

野間「なるほど」

薦「ハイミのブースが一番デカかったんだけど、奴らのメイ
ンストリームは、リン酸鉄リオンだ。皮肉にもバッテリー
のエネルギー量は低い（笑）」

野間「（笑）・・・実は明日、ハイミの人と会うんだ」

薦「へえ、あそう。なんでハイミと？」

野間「もしかしたら相談することになるかも」

薦「え？相談？野間が？珍しいな」

野間「まあ」

薦「なんだよ。なに話すんだよ。ハイミと」

野間「ああまあ週明け言うよ」

薦「・・・そう・・・まだ仕事？」

野間「ああ。まだちょっと」

薦「残念。じゃあ先帰るわ」

野間「お疲れ」

薦「お先」

と言って帰ろうとする背中に向かって、

野間「薦」

薦「ん？」

野間「あのさ、もし薦がタイタニックの乗組員だったとして、

船が氷山にぶつかりました。さて薦ならどうする？」

薦「ええ？なにそれ？心理テスト？」

野間「そう。心理テスト」

薦「それでなにがわかんのかよくわからんが、そうだな、俺
だったら・・・こっそり逃げるかな。船内がパニック状態
になる前に、脱出ボート使って先に逃げるよ」

野間「（苦笑）なるほどね。そりゃ賢い」

薦「野間は？」

野間「え？」

薦「野間だったらどうすんだよ」

野間「俺か？俺な。俺は・・・どうすんだろうな」

薦「・・・」

野間「少なくとも逃げはしないかな。やりたいことがある以
上は」

薦「さすがだよ」

薦、そのまま退社する。

仕事の続きをし始める野間。

【シーン１ ラウンジ】 土曜日

翌日。ゆったりとしたBGM。

かおり、登場してラウンジの椅子に座る。

かおりのスマホが鳴る。

かおり「（電話）はい益子です・・・ではフロントの向かい

にカフェラウンジがあると思うんですが、そこに入っても

らえますか。奥の窓際の席にいます」

野間「（袖から）奥の窓際」

かおり「（電話）グレーのスーツです」

野間、入ってくる。

野間「（電話）（かおりを見つけて）あ、わかりました（切る）」

野間、近付き、向かいに立つ。

かおり「（立ち上がり）お待ちしてました」

野間「益子さんですか？」

かおり「はい。（名刺を差し出し）エージェントの益子です。初めまして」

野間「（名刺を差し出し）山東電機の野間です」
かおり「頂戴いたします。」

2人、椅子に座る。

かおり「すいません。休日に呼び出して」
野間「いえ」

かおり、スタッフを呼ぶ。
スタッフが来る。

かおり「なんにしますか？」

野間「じゃあコーヒーで」

かおり「コーヒー2つ」

スタッフ「ホットでよろしいですか？」

野間「はい」

かおり「はい」

スタッフ「ホットコーヒー2つでよろしいですね？」

かおり「はい」

スタッフ「かしこまりました」

スタッフ、去る。

かおり「電話でもお伝えしたように、私はあくまでハイミの

エージェントであって、ハイミの社員ではありません」

野間「ハイミの人も来るんだと思ってました」

かおり「こういう場にクライアントが直接来ることはありません。あくまで我々エージェントが代理で交渉に当たります」

野間「日本人なんですね」

かおり「中国メーカーは日本のエンジニアを求めています。なので私たちみたいな存在が必要なんです」

野間「なるほど」

かおり「ご存じの通り、ハイミは山東電機と違い、若い、これからのグローバル企業です。何より開発への投資を惜しみなくしています。つまり野間さんが好きなだけ研究開発できる環境ということですよ」

野間「（吃驚）好きなだけ使えるんですか？」

かおり「予算はあつてないようなものだと思っています」

野間「大丈夫なんですか？私が心配することじゃないですけど」

かおり「中国人はハイリスクハイリターンの国民性です。じやなきや10億人の中でのし上がることなんかできません」

野間「へえ」

かおり「年俸も今の」

スタッフがコーヒーを持ってくる。

スタッフ「コーヒー2つ、お持ちしました」

スタッフ、コーヒーを置いて去る。
2人、それぞれのペースで飲み始める。

かおり「年俸は今の倍を用意します」

野間「倍？」

かおり「はい。倍の二千万です。特許レベルの開発に成功した時はさらにプラスします」

野間「二千万にプラス？」

かおり「はい。研究所は本社のある青島ですが、住むところはこちらで用意します。えっとご家族は確か・・・」

野間「妻一人。子供はいません」

かおり「であればお2人で5LDKの高層マンションにお住いになります」

野間「すごいですね」

かおり「リチウムイオンポリマー二次電池の量産に成功した野間さんに私たちは注目しました」

野間「どうもありがとうございます」

かおり「野間さんは今の待遇に満足していますか？」

野間「待遇ですか？」

かおり「それにこれからますます肩身の狭い思いをしていますくんじやないですか？」

野間「会社がどうなるのか私にはわかりません。それに興味もないです」

かおり「でもこれまでのような自由はなくなると思っています」

野間「そうなりますかね？」

かおり「間違いなくあります。創業者は「金太郎飴で何が悪い」が口癖でしたしね」

野間「・・・中国よりよっぽど共産主義だ」

かおり「(笑)確かに」

野間「ちなみに周りのスタッフはどういう人たちですか？」

かおり「北京大学や精華大学を首席で卒業したエリート中のエリート集団です」

野間「でも若いんですよね？」

かおり「はい。経験値は今のチームには及ばないかもしれませんが」

野間「同期もそんなこと言ってました」

かおり「(手帳を見て)同期って、蔦さんのことですか？」

野間「はい。あそんです」

かおり「コンビで開発してきたそうですね」

野間「私の開発作業はほとんど彼が絡んでいます。蔦がいなかったらうまくいってなかったこともたくさんあります」

かおり「信頼してるんですね」

野間「絶大な信頼をしています」

しばし間。

かおり「では蔦さんにも一緒に来てもらおうっていうのはどうでしょう？」

野間「え？」

かおり「野間さんと同じ条件っていうわけにはいきませんが、でもそれに近い条件をハイミ側に飲ませることは可能です。説得する自信はあります。野間さんが絶大な信頼をしている方であれば交渉は可能だと思います」

野間「蔦も一緒に？」

かおり「ええ。つまり今と同じチームで、好きなだけ開発費を使っていという環境になります」

【シーン2 オフィス】月曜日

薫がオフィスに入ってくる。

野間も続いて入る。

薫「まさかそれ言うために朝早く呼んだのか？」

野間「そう。いい話だと思わない？」

薫「思わないね」

野間「え？」

薫「ハイミと会うって、ヘッドハンティングだったのか」

野間「（興奮）何言ってるんだよ。開発費を好きなだけ使っていいって言われたんだ。今まで諦めてたことが実現すんだよ。いい話じゃないか」

薫「声でかいよ。（腕時計を見て）そろそろみんな来る時間だ」

野間「なに冷静になってんだよ。好きなだけ開発していいって、こんな天国あるか？」

薫「エンジニアである前に俺は夫であり父親だ。家族を中国に同行させるなんてできないし、離れて暮らすのはもっと嫌だ。親の介護のこともある。冷静になんないけないのはお前だ」

野間「冷静だよ俺は」

薫「典子さんはなんて言ったんだ？一緒に中国行ってもいいって言ったか？」

野間「・・・」

薫「だよな。そりやそうだ。彼女は売れっ子のプログラマーだ。日本での仕事如山ほどある」

野間「俺なら中国で勝負するけどな」

薫「勝負ってなんだよ。日本で築いた実績や信頼関係捨てて勝負する意味がどこにあんだよ」

野間「また一から作ればいい」

薫「一からってそんな簡単に言うなよ。典子さんの苦勞も知らないでさ。大変だったと思うよ。今まで」

野間「うちのことはどうでもいいだろ。俺たち夫婦の問題だ。俺は薫に聞いてんだ」

薫「だったら断ってくれ」

野間「・・・」

薫「野間、この前言ったよな。松川がリオン手放すわけないって。俺もそう思う。手放すわけがない。リオン開発やるなら俺たちしかない。そうだ。2人で松川見返してやろう」

野間「見返す？」

薫「山東の技術力だ。松川なんか足元にも及ばないって」

野間「見返してどうすんだよ？」

薫「納得させんだよ。好きなようにさせろって。好きなようにできんならハイミに行く理由はない。だろ？」

野間「まあ、そうだな」

薫「俺が野間を全力でサポートする。なあ、断ってくれ」

野間「わかったよ」

広重が入ってくる。

2人がいることに一瞬吃驚して、

広重「おはようございます」

2人「(口々に) おはようございます」

広重「ここにいたんですね。席に居なかったんで遅れてくるのかと思ってました」

薦「部会始めますか？」

広重「はい。松川電器の人も来ますから」

薦「わかってます」

朱美が入ってくる。

朱美「おはよう」

2人「(口々に) おはようございます」

朱美「野間リーダーどう？まとまった？」

野間「はい。なんとか」

と言って、報告書を朱美に提出する。

朱美「ありがとう。あとで読んでおくね。(薦に) どうだったPM2.5？」

薦「(笑) それですか気になんのは？ええまあひどいときは10メートル先も見えなかったですね。経済成長もいいけど、人間らしい生活がしたいなって改めて思いました」

朱美「私もどうも好きになれないのよね中国。なんか全部度が過ぎてる気がして。爆買とか。センスないっていうか。出張ならいいけど、転勤とか言われたら速攻辞めるわ」

薦「鈴木副部長もそう思いますか？」

朱美「ええ。なんで？」

薦「いえ。何でもないです」

広重「その前に私が鈴木副部長を異動させませんよ」

朱美「ありがとうございます」

中野が入ってくる。

真矢、宇部が続く。

中野「こちらです」

真矢「ありがとうございます」

中野「広重部長、大下さん、病院寄ってくるそうです」

広重「そうですか。では山崎室長、次世代電池事業部はこれで以上です」

真矢「そうですか。わかりました」

朱美「でも最近少し多すぎると思いませんか？病院立寄り」

広重「大下さんですか？」

朱美「ええ。最近ちよっと多くなって気になってたんです」
広重「私は妊婦になったことがないのでなんとも言えませんが」

中野「なったことがあったら怖いですよ(笑)」

朱美「あとで私から大下さんに話を聞いておきます」

広重「よろしく願います・・・えっとご紹介しますね。松川電器の山崎室長と宇部課長です。山東電機が松川グループの一員として対応しくなるためにどうすればいいのか、私たちにご指導いただく方です。で、よろしんですね？」

真矢「はい。初めまして。松川電器人事部統合プロジェクト室の山崎です。そして」

宇部「宇部です。よろしく願います」

真矢「よろしく願います。どうぞ、お掛けください：：まず初めに統合プロジェクト室のミッションからお話します。統合プロジェクト室は今回のような新たなグループ会社に対して、松川電器のビジョンやDNAをお伝えして、より強いグループに進化させることがミッションです。そのためにグループ社員である皆さんのお話をお聞きし、ワークスタイルやキャリアパスの観点からどうしていくのが会社と個人がwinwinの関係になれるかを考え、アドバイスしていくことになります。私と宇部がこちらを初めとした開発部門を担当します。ですので、これからしばらくこちらにお邪魔する日々が続きます：：今回の件で色々思うところもあるでしょうし、不安に思っていることあるでしょう。しかし私たちはそういったメンタルな部分も含めてケアして、ベストな提案を会社にしていくつもりですので、思うところがあればすべてお話しいただきましたと思っています：：さて、ここまでで何か質問ありますか？：：よろしいですかね？：：まあ質問を思いついたら遠慮なく随時お聞きください。ではこれからしばらくの間、どうぞよろしく願います」

山東社員「（口々に）よろしく願います」

【シーン3 ラウンジ】火曜日

BGMが流れる。

真矢、宇部がそのまま入ってくる。

宇部、ipadをテーブルに置き操作。

オフィスではそれぞれ仕事をしたまま。

真矢「どう思った？」

宇部「かなり警戒されてますね」

真矢「当然ね。それから？」

宇部「（ipad）この2人」

真矢「ああ」

宇部「明らかに戦力外だと思います」

真矢「2人はこの部署に必要ないでしょう」

宇部「異動させますか？」

【オフィス】月曜日

中野「（広重に）（スイングしながら）土曜日、どうでした？」

広重「（首を横に振る）」

中野「あれ？ダメでした？」

広重「スライスが直ったと思ったら今度はフック。全然飛ばしませんでした」

【ラウンジ】火曜日

真矢「飛ばすのもね。受入れ先があるとも思えないし。あの年じゃどうにもならないでしょう」

宇部「リストラですか？」

真矢「なるべくそっちの方向で」

宇部「ちょっと可哀想な気もしますけど」

真矢「何度も言うけど、この仕事に同情は禁物。松川が傾けば」

2人「明日は我が身かもしれない」

宇部「わかってますよ。でもそんなうまくいきますかね？労働組合がなんか言ってくるかもしれないから」

真矢「管理職に労組は関係ないから」

宇部「あそうか。そうでした」

真矢「中野副部長を利用しましょう」

宇部「・・・どういことですか？」

真矢「中野副部長から説得してもらうんです。自主退社してもらいように」

宇部「自主退社？それを中野副部長から？」

真矢「松川がリストラを進めてるってわかれば、山東電機全体の士気に関わるでしょ。モチベーションを下げることなく、会社をスリム化させる、それが私たちのテーマ。いい？」

宇部「・・・わかりました」

真矢「(i pad) 上2人以上に大事なことは、この2人を辞めさせないこと」

【オフィス】月曜日

薦「(記録紙を野間に見せ) H2の値だ」

野間「(吃驚) 放電容量225パーグラム。リチウムより30パーも高い。電圧1.55は変わんないのに。こりやすごいな」

薦「低温合成法のおかげだよ」

野間「ナトリウムがいいんじゃないかって言ってくれたからだ」

薦「このまま進めるか？」

野間「もちろん。今度は正極にマンガン使って試してくれ」

薦「マンガン？」

野間「ああ。マンガン酸リチウムだ」

薦「なるほど。わかった」

野間「鈴木副部長」

朱美「ん？」

野間「今、話していいですか？」

【ラウンジ】火曜日

真矢「2人を絶対に放さないこと。これを第一プライオリティとして考えましょう」

宇部「松川電器の未来が2人に掛かってるわけですね」

真矢「正確に言えば、野間リーダーを辞めさせないために薦サブリダーが必要ってこと。そこは間違えないように」

宇部「はい。具体的には？」

真矢「野間リーダーの要望を極力聞くこと。不満を抱かせないようにケアしましょう」

宇部「わかりました。(i pad) 女性二人はどういう方針でいきますか？」

由麻、オフィスに入ってくる。

お腹が大きく辛そう。

真矢「もう少し様子を見ましょう」

宇部「リストラの可能性はありますか？」

真矢「何とも言えない。ただ、うちは今、女性管理職を増やす方針でしょ。そういう意味で格好の広告塔になりうるかもしれない」

宇部「能力よりも対外的な施策として評価するわけですね」

真矢「そう。リケジヨのあこがれとしてね」

【オフィス】月曜日

「この時までには男性社員はここにいない。」

朱美「大下さん」

由麻「はい」

朱美「ちよっと」

由麻「はい」

由麻、朱美の横に来る。

朱美「今朝はどこ行ってたの？」

由麻「え？連絡入れたはずですけど」

朱美「私は今、質問をしているの？どこに行ってたんですか？」

由麻「病院に行っていました。産婦人科です」

朱美「毎週行ってるようだけど、そんなにに行く必要があるの？」

由麻「え？どういう意味ですか？」

朱美「今、7か月目よね？」

由麻「はい。そうですけど」

朱美「ネットで調べただけで、7か月目の健診って2週間に1回程度って書いてあったの」

由麻「はあ」

朱美「毎週行く必要があるの？」

由麻「疑ってるんですか？」

朱美「そうじゃないけど。いい？私だって大下さんに元気な赤ちゃん産んでほしいって思ってます。でもちよっと甘えすぎじゃないかしら」

由麻「甘えてなんかいません」

朱美「妊婦だったら許されると思ってたら大間違いよ」

由麻「病院の方針なんです。毎週来るようにって」

朱美「（叱責）だったら病院を変えてください」

由麻「（吃驚）え？」

朱美「今、うちがどういう状況かわかってる？ここで踏ん張んなきゃ山東電機の看板がなくなるの。新製品開発に遅れを取るわけにいかないのよ。だから大下さんにももっと仕事にコミットしてほしいの」

由麻「してます。仕事。確かに前ほど時間を掛けることはできなくなりましたけど、できることは精一杯やっています」

朱美「野間リーダーが？」

由麻「はい。手抜きをしているつもりはありません」

朱美「じゃあせめてもう少し残業してくれる」

【ラウンジ】火曜日

宇部「鈴木副部長をリクルート対策に担ぐわけですね。賛成です」

真矢「え？」

宇部「山東社内では彼女は評判がいい。実績も上げてるし、いいと思います」

真矢「私が言ったのは大下さんの方」

宇部「大下さん？まだ若いし何の実績も上げてないのに？」

真矢「今の女子学生に出産か仕事かどっちかを選ぶという考えはない。出産も、仕事も、バリバリこなすのがこれからの女性。鈴木副部長は独身。女子学生の憧れにはならない」

宇部「そういうもんなんですね」

真矢「鈴木副部長は女子社員から煙たがられるタイプでしょうね。毒女とか言われて」

宇部「毒女？」

真矢「独身女性のこと。毒はポイズンの毒」

宇部「はあなるほどですね」

【オフィス】月曜日

この時までには由麻が一人になっている。

由麻「アラフォー毒女、こえ〜」

【ラウンジ】火曜日

真矢「じゃあ今話した方向で」

宇部「はい」

真矢「（立ち上がりながら）大変な仕事だけど、やりがいはあると思うから」

宇部「（続いて立ち上がりながら）前は採用にいたんで受け入れる方でしたが、今度は人を切る立場になるんですね。彼らもそうでしょうけど、私も不安です」

真矢「大丈夫。この仕事、慣れることはないから」

宇部「え？」

真矢「不安なのは私も一緒」

2人、そのまま去る。

スタッフ「（袖から）ありがとうございます」

スタッフ登場し、コーヒースタッフを片付ける。
片付け終わったら、去る。

【シーン4 オフィス】水曜日

中野「（袖から）お疲れ様。身体気を付けて」

中野が入ってくる。

その後を野間が続く。

野間は手に開発依頼書を持っている。

野間「（興奮）中野副部長、これは一体どういうことですか？」

中野「だからそこに書いてる通りだよ」

野間「ここに書いてることが何なのかは読めばわかります。

私はなんでこれを受けたのかって言ってるんです」

中野「営業要請だからに決まってるんだろ」

野間「いくら営業要請でも受けていい仕事と受けちゃいけない仕事があります」

中野「受けちゃいけない仕事ってなんだよ？」

野間「（依頼書）これです」

中野「だからお前は自分勝手だって言われんだよ。金になる仕事を断る理由はない」

野間「あります。うちは今、世界最小の車載バッテリーに資源を投入しきってます。(依頼書) こんなものを開発する時間も人もありません」

中野「こんなものって言っちゃいかんだろ。営業さまがせっかく持ってきてくれたメシのタネだ」

野間「だからそういう余裕がうちには、」

中野「なかつたら余裕作れよ。野間リーダーなら1ヶ月もあれば開発できんだろ」

野間「まさか今の仕事を1ヶ月遅らせろと？」

中野「そうだ。そんなまだ金になるかわからん開発に時間を掛けるくらいなら、確実に稼げる仕事を先にやってくれ」

野間「この世界、1ヶ月の遅れが命取りになること、中野副部長、よくご存じですよね？」

中野「そんなに言うんなら2つの開発を同時にやってくれ」

野間「同時って」

中野「車載バッテリーの開発が今重要なのはわかってる。でも、それ以上にその開発も重要なんだ。いいか。俺たちは学生じゃない。サラリーマンだ。会社に貢献する義務がある。大人になってくれ」

薫が入ってくる。

今まで開発室にいたようだ。

野間「2つの開発を同時って」

薫「どうしたんですか？」

中野「ああまあ」

薫「何かありましたか？」

中野「営業から開発依頼が来た。それを野間リーダーにお願いしただけだ」

薫「開発依頼？車載バッテリーで忙しいときに？」

中野「大至急だ」

薫「なんなんですか？」

野間「糞みたいな仕事だよ」

と言つて開発依頼書を薫に渡す。

薫「(読んで) ヤマノ電機の格安スマホ？」

野間「OEMだと。SANTOブランドならともかくPBのバッテリー開発をやれだ」と

薫「これは安いな」

野間「スペック削って安く卸せてさ。そんな開発、小学生でもできる。質の悪いグラフィイトを使えばいいだけだ」

薫「そんな単純じゃないだろ。PBとは言え、安全性は担保しなきゃいけないし」

中野「薫サブリーダーならわかってくれるよな。この依頼を受けなきゃいけない事情」

薫「ええまあ痛いほど」

中野「営業だつて必死なんだよ。山東を潰さないように。ヤマノ電機のPBってことは数万台の売り上げが保証されるってことだ。頼む。野間リーダー、引き受けてくれ」

野間「なんで俺が・・・」

薫「山東電機の社員だからだ」

野間「・・・」

薦「確かに今、量販店の格安スマホが売れている。いいもの作って売れば金回りがよくなって、開発費の予算が増える、かもしれない。野間、前向きに考えよう」

野間「増えるもんか。もっと安いバッテリー作れて言われるだけだ」

薦「今はバッドシナリオを想定すべきじゃない。これが売れて開発費の予算が増える、グッドシナリオを想定しよう」

野間「グッドシナリオ？ドリームシナリオだろ」

薦「野間」

野間「早くて2ヶ月。普通なら3ヶ月はかかる案件だ。それでもそれをやれと？」

薦「3ヶ月？そんなに？」

中野「野間リーダーなら1ヶ月あればできる」

野間「できるかもしれないが、できないかもしれない。できなかつたら、3ヶ月車載バッテリーの開発がストップするんです。リーダーとしてその判断はできません」

中野「……」

野間「(薦に) 来年3月に完成させるスコープ組んだよね？今まで俺が遅れたことあったか？」

薦「……」

野間「だったら今はそんなことよりも、やるべきことをやろう」

薦「3ヶ月？6月になるってことか」

野間「来年3月を目指して取り組むのが開発リーダーである俺の責任だ。6月じゃない。3月だ。サブリーダーなら従ってくれ」

薦「……」

野間「リーダーを支えるのが、サブリーダーの仕事なんだろう？」

薦「……」

中野「そうは言っても会社は今、大変な時なんだ。3月まであるかどうか分からない。だったら今取るべき選択はすぐ金になる仕事だ」

野間「わかりますが、なんでそれを俺がやらなきゃいけないんですか？他にいないんですか？」

中野「他の部署でやってくれるなら私も断った。でもその開発はうちじゃないとできない。そう判断したから引き受けた。そういうことだ」

野間「私だって会社のことを考えて意見してるつもりです。車載バッテリーの開発に成功すれば、いや絶対成功するんです」

中野「言いたいことはわかる。でも今、この会社を救えるのは野間リーダーしかない」

野間「……」

中野「副部長の私をお願いしている。野間リーダー、よろしく頼む」

しばし間。

野間「わかりました」

薦「え？」

中野「そっか。ありがとう」

薦「ホントにいいのか？」

野間「……」

そこに真矢と宇部が入ってくる。

中野「ああ、お疲れ様です」

真矢「お疲れ様です。ちよっといいですか？」

中野「私ですか？」

真矢「はい。あ、この後なんかありました？」

中野「いや帰るだけでしたけど」

真矢「だったら10分、15分、いいですか？」

中野「あはい」

と言つて椅子に座る。

真矢「いや、ここじゃなくて、外でお茶しませんか？」

中野「え？外？・・・なんですしか話つて。嫌な予感しますけど」

真矢「いやいや中野副部長にとつて悪い話じゃないです。ただちよっとここじゃなんなので」

中野「わかりました」

真矢「ありがとうございます」

中野「じゃあ頼むな」

真矢「はい。(宇部に)あとよろしくね」

宇部「はい。行つてらっしゃい」

真矢「すいません。仕事終わりに」

中野「あいや大丈夫です」

と言いながら、2人、退社する。

宇部「(野間に)どうかしましたか？」

野間「？」

宇部「具合悪そうですね」

野間「悪くもありません」

宇部「え？」

野間「ハイスペックを開発しろって言われたり、ロースペックを開発しろって言われたり。なんなんですかね、会社って・・・宇部課長に愚痴ってもしょうがないことはわかってますが」

宇部「そんな。気にしないでください」

野間「すいません」

宇部「差支えなければ、その、何を言われたのか教えてもらえませんか？」

2人、顔を見合わせ、怪訝な顔。

宇部「山東電機はうちのグループ会社になります。ですから今後はお互いの開発案件を、それぞれ共有していこうっていうのが経営側の方針です」

真矢「開発を共有するんですか？」

宇部「はい。ライバル関係じゃなく、仲間として一緒に船に乗ろうっていうわけです」

真矢「一緒にの船？」

野間「開発部門も？」

宇部「そうです・・・あ、でも経営統合されても、この次世代電池事業部はそのまま維持継続されると思います」

真矢「そうなんですか？」

宇部「ええ。まあそらく」

野間「賢明な判断だと思います」

宇部「ですよ？それで、あの、共有させてもらえませんか？」
鳶「上からこの開発をやれと言われました」

と言つて、開発依頼書を宇部に渡す。

宇部、それを読み始める。

宇部「なるほどですね。（依頼書）これを開発しろと？」

野間「それがうちの現状です。1年後の栄光より、明日の飯が重要なんです」

鳶「明日の飯が食えないと、1年後の栄光もないだろ」

野間「鳶はどっちの味方なんだよ？」

鳶「どっちとかそういうことじゃないだろ。強いて言えば山東の味方ってだけだ」

野間「そんなこと言ったら俺も一緒だ。山東復活の近道は、（依頼書）そんなことに時間を掛けないことだって、なん

でわかんないんだよ」

鳶「宇部課長の前ではやめよう」

野間「今さら何言ってるんだよ」

宇部「（苦笑）事情はよくわかりました」

鳶「すいません」

宇部「いえ」

しばし間。

鳶「2人とも山東電機が大好きなんです。自由に開発させてくれる会社ですから、僕たちみたいな人間にはやりがいがあるっていうか」

野間「・・・」

宇部「いいですね。そんなこと普通なかな言えませんか？」
鳶「でもご存知の通り、最近はなかなか好きないようにさせてもらえなくて」

宇部「なるほどですね」

鳶「はい」

宇部「あの、私の提案、聞いてもらえますか？」

鳶「提案？」

宇部「はい。（依頼書）この開発、うちが引き受けたいんです」

鳶「松川さんが？」

宇部「そうです。松川電器が（依頼書）これをやるんです。もちろんその後の製品化は御社がやることになります」

鳶「親会社の子会社に部品を供給する？そんなことありえるんですか？」

宇部「確かにこんなこと言ってできなかったら申し訳ないんですが、ただ私も上から、お2人の研究開発を全力でサポートしろと言われてますから、決してありえない話ではないと思ってます」

鳶「・・・」

野間「ホントですか？」

宇部「うちの技術が受けてくれればの話なんで、私の権限では何とも言えませんが。でも仮にダメだったとしても他のグループ会社に打診して、引き受けてくれるとを全力で探してきますよ」

野間「さすが松川電器」

宇部「無理難題はみんな解決しましょう。それがグループ経営最大のメリットです」

野間「じゃあ、今のプロジェクトをそのまま進めていいってことですね？」

宇部「私が責任もって広重部長・中野副部長を説得します」

野間「ありがとうございます」

宇部「それじゃ早速会社に戻って聞いてきます。コピーいただいてもいいですかね？」

野間「(薫に) いいよな？別に技術情報のこと書いてるわけじゃないし」

薫「・・・(手を出し、依頼書を受け取る) ちょっと待っててください」

宇部「ありがとうございます」

薫、開発依頼書を手に部屋を出る。

宇部「野間リーダーはなんで山東電機に入ったんですか？」

野間「唐突ですね・・・なんでですかね。改めて聞かれると困りますね」

宇部「そうですか？」

野間「はい」

宇部「でもさっき薫サブリーダーが2人とも山東電機が大好きって言ってましたけど」

野間「(苦笑) そうですね」

宇部「どこが好きなんですか？山東電機の」

野間「私もその分、技術開発を成功させてきたわけです。結果、会社も潤ったはずですよ」

宇部「そうですね・・・ただ会社側からすれば、それはギャンブルです。だって野間さんの好きなことが会社の利益と結びつくか管理してないんですから」

野間「さすが松川電器。やっぱり管理は重要ですか？」

宇部「そりゃあ会社ですから管理は重要です。好き勝手やっていいなんてありえません」

野間「まそりやそうですね」

宇部「会社は株主のものですから」

薫が戻ってくる。

薫「(コピーを宇部に渡し) どうぞ」

宇部「ありがとうございます。では早速行ってきます」

野間「よろしく願います」

宇部「任してください。それじゃ失礼します」

薫「よろしく願います」

宇部、退社する。

【ラウンジ】水曜日

スタッフ「(袖から) いらっしゃいませ」

真矢が入ってきて椅子に座る。

【オフィス】水曜日

野間「蔦」

蔦「ん？」

野間「俺は山東電機が好きなのじゃない」

蔦「え？」

野間「蔦は誤解している。俺は山東電機が好きなのじゃない」

蔦「誤解？」

野間「ああ。俺はこの環境が好きなのだ」

蔦「そうか」

野間「ああ」

2人、開発室に入っていく。

【ラウンジ】水曜日

真矢のスマホがバイブする。

真矢「（電話）例のカフェラウンジにいる・・・そっちはどうだった？・・・うん・・・うん・・・営業要請でPB？・・・そう、それはいい判断ね。私からも技術部に言っておく。なんとか説得しよう・・・私たちの最大のミッションは野間リーダーのケア。だから当然じゃない・・・え？・・・うん、こっちもうまくいった。中野副部長は私たちの思い通りに動いてくれる。不要なものはどうも切っていくましよう」

真矢、そのままロパクで電話を続ける。
ラウンジを背景に【オフィス】が展開。

【シーン5 オフィス】木曜日

朱美がデスクから出てくる。

野間、開発室から出てくる。

野間「鈴木副部長」

と言って、結果の紙を見せる。

朱美「1サイクル目の放電容量が249、で・・・5サイクル目が243。ほぼ100パーじゃない」

野間「はい。それで降も安定した充放電効率です」

朱美「期待通りね。じゃあこのまま進めましょう」

野間「わかりました」

朱美「とにかくこの開発を急いで。社の命運は（紙）これに掛かってるから。頑張って」

野間「・・・」

朱美「何？」

野間「だったらなんでPBの開発をやらせようとしたんですか？」

朱美「PB？・・・プライベートブランド？なんのこと？」
野間「ヤマノ電機の格安スマホです。そのバッテリー開発を優先しろって。昨日、中野副部長に言われましたが・・・」

朱美「知らない。なにそれ？」

野間「ホントですか？」

ラウンジではスタッフが注文を取りに。
野間、デスクに向かい、依頼書を渡す。

野間「営業要請だからわがまま言うなって」
朱美「え？」

朱美、依頼書を読みだす。

朱美「（読みながら）こっちは山東電機の社運を賭けたプロジェクトなのよ。中野副部長は一体何考えてんの？」

野間「鈴木副部長に相談なかったんですか？」

朱美「現場先に動かして、後から言うつもりだったんでしょ。中野副部長の考えそうなことね」

野間「すいません。知ってると思ってました」

朱美「（依頼書）このこと？知るわけないじゃない。知ってたら断るに決まってるでしょ」

野間「ですよ」

朱美「で、（依頼書）これはどうなったの？」

野間「松川電器の宇部課長がなんとかしてくれることになりました」

朱美「松川が？」

野間「はい。松川の技術に聞いてみるそうです」

朱美「松川がうちにバッテリーを供給する？」

野間「はい。そう言ってくれました」

朱美「そう。いずれにしてもこれから、中野副部長から直接何か言われたら、私にも報告してくれる？」

野間「わかりました」

朱美「勝手なことされたらたまらないから。とにかく今は、車載バッテリーのことだけを考えて。いい？」
野間「はい」

ラウンジではスタッフがコーヒーをサーブ。

野間「鈴木副部長」

朱美「なに？」

野間「あの、付かぬことをお伺いしますが・・・鈴木副部長は、その、なんで山東電機に来たんですか？」

朱美「え？うちに？」

野間「はい」

朱美「志望理由？」

野間「はい」

朱美「研究室の推薦」

野間「それはわかってます。他に行きたいとこなかったんですか？」

朱美「いや別に。就職できればどこでもよかったから」

野間「そうですか」

朱美「入るときの理由はないけど、この会社に残ってる理由は、ある」

野間「なんですか？」

朱美「松川電器を見返すこと」

野間「見返す？」

朱美「ああいう資本力もあって、人材も揃ってて、ブランドも確立されてるような、なんでもある会社にはぜったいに負けたくない」

野間「・・・」

朱美「つていうつもりで今まで頑張ってきたんだけどね、まさか買収されるとは。驚いた」

野間「はい」

朱美「どうしてそんなこと聞くの？」

野間「いや、昨日、宇部課長に聞かれました。鈴木副部長はどうだろうって思ったもんですから」

朱美「野間リーダーはなんて答えたの？」

野間「・・・自由に研究開発させてくれるから。そう答えました」

朱美「野間リーダー」

野間「はい」

朱美「辞めないでね。山東電機」

野間「・・・」

朱美「あなたはうちが誇るトップエンジニアなんだから」

野間「あいや、いきなり何を」

朱美「野間リーダークラスなら、色んなとつから声掛かってるでしょ？」

野間「いやそんなことは」

朱美「まだないならこれから絶対声が掛かるから・・・会社がこんなんだから、そこ狙って、あの手この手で引き抜こうとするでしょう」

野間「・・・」

朱美「あなたの人生、どういう選択をしようが」

由麻が開発室から入ってくる。

朱美、一瞬、迷うが続ける。

朱美「あなたの人生、どういう選択をしようがあなたの自由だけど、でもね、会社がこんなときだからこそ一緒に頑張ってる、松川電器見返してやりましょう。山東電機にもこんな優秀なチームがあったんだって。ね？」

野間「頑張ります」

朱美「大下さんも」

由麻「はい？」

朱美「会社がこんなときだからこそみんなで力を合わせて、松川電器見返すのよ。今が一番重要な時なの。そのつもりでお願いね」

由麻「ああはい」

朱美「それでチタン酸ナトリウムの粒径制御なんだけど、明日までに100サイクルのデータを取ってもらえる？」

由麻「え？」

野間「わかりました」

由麻「明日まで？」

朱美「当然。1分1秒争うの。とにかく結果を出すこと。いい？」

野間「はい」

朱美「大下さんもチームの一員なら、協力して」

野間「ああでも大丈夫です。（由麻に）いいよ。薦サブリダーもいるし、大下は帰っても」

由麻「ありがとうございます。教授」

朱美「ダメに決まってるじゃない」

2人「え？」

朱美「（由麻に）今の話、聞いてた？」

由麻「はい？」

朱美「この案件は1分1秒を争う社の特命プロジェクト。松川電器を見返すチャンスなの。もちろん私も責任者として付き合います」

野間「え？いいですよ。いてもらっても何もすることないし。

明日、報告しますから」

朱美「何もすることなくても、私にはこのプロジェクトを成功させる責任がある。だったら私だけ帰るわけにいかないでしょ」

由麻「でも私、体調が」

朱美「この前言ったこと覚えてる？妊婦でも甘えてなんかいない、手抜きなんかしてないって」

由麻「言いました」

朱美「だったら仕事をして。今しないと一生後悔することになる。それくらい重要な日なの。今日は。わかった？」

由麻「・・・」

朱美「私の言った意味が分からないのであれば、この会社にあなたの居場所はない」

由麻「わかりました。やります」

野間「いいの？大丈夫？」

朱美「OK。今こそチーム一丸になって松川、見返しましょう」

2人「はい」

朱美「お腹空いた？」

野間「え？あはい」

朱美「出前取ります。何がいい？」

野間「ああじゃあ肉食であればなんでも」

朱美「大下さんは？」

由麻「いません」

朱美「そう。遠慮しないでいいのよ」

由麻「遠慮なんかしてません。そういう気分じゃないだけです」

朱美「そう。あとコンビニ行くけど、デザートいる？」

野間「あじゃあメビウスお願いしてもいいですか」

朱美「たばこ？OK。じゃあよろしくね」

野間「はい」

朱美、退室する。

朱美がいなくなったことを確認して、

由麻「毒女、最悪」

野間「あんま無理すんなよ」

由麻「教授、知ってます？鈴木副部長、ホントは松川電器に行きたかったんですよ」

野間「え？」

由麻「うちの旦那、同じ研究室にいたの、前に言いましたよね？」

野間「うん」

由麻「聞いたんです。鈴木副部長、ホントは松川電器に行きたがってたのに推薦してもらえなかったんですって」

野間「・・・」

由麻「最悪だと思いません？それで松川のこと見返しましうって。個人的な感情にうちら巻き込むって話ですよ」

野間「俺は別にどうでもいいけどな。個人的な感情だろうが何だろうが」

由麻「え？」

野間「結果的にやりたいことをやらしてくれてる」

由麻「さすが教授。ブレませんね」

野間「その教授って言うの、いい加減やめてくれないか」

由麻「いいじゃないですか。私にとっては教授です」

野間「（ため息）」

そこに広重、中野、薦が来る。

広重は手に開発依頼書を持っている。

広重「野間リーダー、PBのバッテリー開発、松川電器がやってくれるって本当ですか？」

野間「え？」

広重「今、薦サブリーダーから昨日の経緯を聞きました」

野間「であれば報告した通りです。なんで私に確認するんですか？」

広重「信じられないからです。松川さんが（依頼書）こんな

コストでやってくれるわけじゃないじゃないですか」

野間「技術部に断られたとしても、どっかのグループ会社がやってくれるって言うてました」

広重「・・・小林本部長に報告してきます」

と云って退室しようとする、

中野「広重部長」

広重「はい？」

中野「小林本部長になんて言うんですか？」

広重「え？」

中野「部下に開発を断られました。そしたら松川さんが助けてくれました。さてどうしましょうって言うんですか？」

広重「なんですか？その言い方」

中野「止めた方がいいと思います」

広重「・・・」

中野「部下を管理できていないって、自分で言いに行くようなものです」

広重「え？」

中野「違いますか？」

広重「・・・」

中野「ここは松川さんの提案に乗った方がいいんじゃないでしょうか」

広重「私の立場はどうなるんですか？」

中野「立場？」

広重「営業トップの村上専務から直々に頼むって言われたんです」

中野「もちろんわかってます」

広重「山東電機の存続に掛かってるんです。松川電器には関係ないことだ」

薦「しかし親会社がやるっていうのを覆せるものでしょうか？」

野間「ちよっと待ってください。まさかまだPBやれって言うんですか？」

広重「当たり前でしょ。それこそがうちが生き残る唯一の方法なんですから」

野間「そんなことはありません。いち早く開発を成功させることこそが、生き残る唯一の方法だと思っています」

広重「それは野間リーダー、あなたがPBの開発をやりたくないからそう思ってるんですよね？」

野間「・・・」

広重「会社組織でそんなわがまま通用しませんよ」

野間「・・・大下」

由麻「はい」

野間「時間をもつたいない。仕事をしよう」

由麻「え？あでも」

野間「リーダー命令だ」

由麻「あはい。わかりました」

野間「私は鈴木副部長の指示に従って仕事をしています。何か問題があれば鈴木副部長に言ってください。失礼します」

薦「おい野間」

野間、無視して開発室に行く。

広重「大下さん、鈴木副部長は？」

由麻「コンビニなんですぐ帰ってくると思います」

広重「そうですか」

由麻「はい。失礼します」

と言って由麻も開発室へ。

広重「薦サブリーダー」

薦「はい」

広重「あなたからも野間リーダーを説得してもらえないでしようか」

薦「え？私もですか？」

広重「同期の責任でもあります」

薦「そんなむちゃくちゃです」

広重「むちゃくちゃでもなんでも野間リーダーを説得してください。お願いします」

薦「確かに私も宇部課長の提案には抵抗がありました。でも冷静に考えたら最善の案だと思うようになったんです。八方丸く収まります。それをなんで覆さなきゃいけないんですか？」

広重「最善ってなんですか？」

薦「え？最もに善悪の善と書いて、」

広重「言葉の意味を聞いているわけじゃありません。会社組織において上司が部下に命令を下す。それは絶対です。もちろん現場で多少の判断をしなきゃいけないこともあります。大卒の方針をはみ出すことは許されません。野球やサッカーで監督の指示が絶対であるのと一緒です。組織とはそういうものです。それはわかりますよね？」

薦「はい」

広重「であれば、役員指示の命令があるのに、それ以外の方策がなぜ最善なんですか？」

薦「・・・」

広重「野間リーダーのわがままを受け入れるから最善なんて考えが起ころんです。上下関係において八方丸くはおかしいです。上司の命令を実行する以外に最善はありません」

薦「いやしかし野間リーダーの言うことにも一理ありまして。山東電機復活のためには、」

広重「一理とか二理とかそんなことどうでもいいです。上司の命令に素直に従うこと。薦サブリーダー、これは部長命令です。野間リーダーを何としても説得してください」

薦「・・・」

広重「そもそも私は中野副部長にお願いしましたよね？」

中野「はい？」

広重「役員命令だから迅速にお願いしますと。私が部下を管理できてないって言うのであれば、中野副部長こそ管理能力を問われますよ」

中野「お言葉を返すようですが、私は私のやるべきことをやりました。事実、野間リーダーにも薦サブリーダーにも、その案件の重要性を理解してもらい、承諾させました。(薦に)嘘は言っていないよな？」

薦「はい」

中野「私がいらないところで宇部課長が提案してきたことです。いかんともしがたいっていうか。いずれにしても私はやるべきことをやりました」

広重「でも実際は命令に背いてるわけですよ？現場は。私はそのことを問うてるわけです。プロセスではなく結果で話をしてください」

中野「結果と言われても私のいないところでされた話です。責任の取りようがありません」

広重「例えば、例えばですよ、親が見ていないところで子供が犯罪を犯した。その場合、親に責任はないと？」

中野「・・・」

広重「中野副部長の言ってることはそういうことです。結果、命令に背いてるわけです。彼らは。中野副部長の責任は重大ですよ」

中野「・・・広重部長、いい加減上だけ見て仕事するの止めませんか」

広重「何を言ってるんですか？」

中野「その役員命令に従ってこの会社はどうなりましたか？結果結果って言いますけど、その肝心の結果を出してない

じゃないですか。会社は。それでも引責辞任しようとしてない役員にこそ問題があるんじゃないんでしょうか」

広重「管理職でありながら会社を批判するんですか？中野副部長、今の発言は聞かなかったことにしておきます」

中野「広重部長、今の役員にはなんの力もありません。今や山東電機は松川電器のものなんです」

薦「松川電器の？どういう意味ですか？」

広重「松川電器のものって何ですか？社長は、山東電機の上場とブランドは維持されるとはつきり言ってくれました。

山東電機は山東電機社員のものです」

中野「社員のもの？金は出すが口は出さないって本気でそう思ってるんですか？」

広重「社長はそう言いました」

薦「松川電器のものって、もしかしてSANTOブランドがなくなるんですか？」

中野「おそろくな。そしてこれまたおそらく将来的には上場も廃止だ。山東電機は松川電器の100%子会社になる。そういうことだ」

広重「ありえない。何を馬鹿なこと言ってるんですか」

中野「その馬鹿なことが現実起こるんです」

【超空間】火曜日

ラウンジにいる真矢とオフィスにいる中野。

呼び出したときの会話が再現される。

中野「そんな馬鹿な。ありえない」

真矢「信じようと思ひまいと山東電機がなくなることは既定路線です。山東は事実上倒産なんです」

中野「・・・」

真矢「これはうちの役員会議で決定した通達事項です。嘘ではありません」

中野「なぜそれを今私に？」

真矢「協力してほしいからです」

中野「協力？」

真矢「はっきり申し上げます。私たちの評価では広重部長、中野副部長はリストラ対象です」

中野「リストラ？私が？」

真矢「はい。申し訳ありませんが、松川電器傘下の新会社に、お2人の居場所はありません」

中野「・・・」

真矢「冷たいと思うかもしれませんが、私たちも明日は我が身なんです。会社が生き残るために、そうせざるをえないんです。ご理解ください」

中野「今まで会社を必死に支えてきました。その会社を生かすために、私の首が切られる。矛盾してるとは思いませんか？」

真矢「矛盾ですか」

中野「あなたにはわからない。私がこれまでどれだけ山東電機に尽くしてきたか」

真矢「中野副部長の視点で見ればそうかもしれませんが。でも逆に会社の視点で見れば、何千何万という人を会社が支えているのも事実です」

中野「他の社員ってことですか？」

真矢「そうです。でもそれだけじゃありません。社員の家族、取引先や販売店、株主、そしてその人たちの家族、あらゆるステークホルダーがこの会社という生き物にすがって生きているんです。いや生かしてもらっているんです。分かれますよね？だから、その何千何万何十万という人たちのためにも、松川電器は潰れるわけにいかないんです」

中野「私の事情は無視ですか？」

真矢「申し訳ありません・・・会社が生き残るために、一個人の事情は関係ありません。会社とは、矛盾を抱えて存在する生き物です」

中野「・・・協力すれば首を切られずに済むんですか？」

真矢「保証します。ただし部署までご希望通りとはいきません。会社ですから」

中野「何をすればいいんですか？」

【オフィス】木曜日

中野「SANTOブランドは解体、上場廃止だと言われました。我が社は実質倒産なんです」

真矢「倒産？」

広重「この山東電機が？」

真矢「そこまですちはひどかったんですか」

広重「山東電機が倒産？私が25年、掛けて来たこの会社が倒産？世界の山東電機が？ありえませんか」

中野「山崎室長の言われたことがどこまで本当なのか私にはわかりません。ただ、人事権はすでにうちにはなく、松川電器にあるようです」

広重「人事権？親会社とは言え、そこまで口を出せるはずがない」

薦「じゃあなんであの2人はここに来たんですかね？」

広重「それはこの前室長が言ってたじゃありませんか。松川電器のビジョン、DNAを伝えるために、」

中野「そんな建前、本気で信じたんですか？」

広重「建前も何も山崎室長がそう、」

中野「広重部長、山崎室長に私ははっきり言われました。新会社にあなたの居場所はないって」

2人「え？」

中野「この次世代電池事業部を強くするために、」

【超空間】火曜日

真矢「若返りをする必要があります。それも一刻も早く。そのために私は松川電器の若いエンジニアをこちらにたくさん送り込もうと思っています。山東電機さんからリチュムイオンの開発技術を学ばせてもらうためです」

【オフィス】木曜日

中野「そう言われました」

広重「なんてことですか」

中野「この部署はもう私たちがコントロールできる状態じゃありません。広重部長、私の言っている意味、分かりますか？」

広重「・・・」

中野「家のローンがまだ30年も残っているのに、息子がこれから小学校に上がるっていうときに、お前は会社に必要ないって言われたんですよ。どうすればいいと思いますか？」

広重「・・・私も、その、なんていうか、リストラの？候補ですか？」

中野「・・・広重部長、これから飲みに行きませんか？」

広重「・・・」

中野「昔は夜中まで働いて、その後2人で飲みに行きましたよね」

広重「ハハ。懐かしい」

中野「久しぶりにサシで」

広重「駅前の笑笑ですか」

中野「いいですね。朝まで行きましょう。あのときみたいに」

広重「言っておきますが・・・割り勘ですよ」

中野「え？」

広重「私にもローンが残ってますから」

中野「（苦笑）あはい」

広重、退社する。

後に続く中野に向かって、

薦「中野副部長」

中野「ん？」

薦「（依頼書）これは、その、どうすればいいでしょうか？」

朱美「（袖で）お疲れ様でした」

広重「（袖で）ホントにお疲れ様です」

そこに朱美が帰ってくる。

両手に大きなコンビニ二袋を抱えて。

朱美「ただいま・・・あれ？中野副部長、まだ残ってたんですか？珍しいですね」

中野「これから帰るとこだ」

朱美「あそうですか。ですよね。良かった。中野副部長の分は頼んでないんで。薦サブリダーの分は頼んでおきました」

薦「何を頼んだんですか？」

朱美「夜食よ夜食。今夜は長丁場。頑張りましょう」

薦「ありがとうございます」

中野「それは鈴木部長の指示に従うように」

薦「わかりました」

朱美「え？何のことですか？指示って」

中野「プロジェクトのことですよ。決まってるじゃないですか・・・それじゃ私はお先に失礼します」

朱美「お疲れ様でした」

薦「お疲れ様です」

中野、退社する。

薦「鈴木、部長って言ってました？」

朱美「やっぱり？私もそう聞こえた」

薦「え？昇進ですか？」

朱美「んなわけないじゃない。うちの会社はまだまだ年功序列。中野副部長を差し置いて、それはないわ。聞き間違えでしょ」

薦「そうですね？」

朱美「え？」

薦「いや、すいません。なんでもありません。鈴木部長」
朱美「だからちょっとやめなさいって」

2人、そのまま談笑。

途中、野間が出てきて加わったり。

【ラウンジ】 木曜日

その日の深夜。

由麻が恐る恐る入ってくる。

真矢、手を上げ居場所を知らせる。

由麻「すいません。お待たせしました」

と言って座る。

真矢「こちらこそ。遅くに呼び出してすいません」

由麻「あいえ、ちょうど帰るところだったんで」

真矢「そう。遅くまで大変ですね」

由麻「いえ。私は（お腹）これなんで先に上がらせてもらいました」

真矢「ああ、体調はどうですか？」

スタッフがやってくる。

スタッフ「〇〇注文は？」

由麻「ああ・・・じゃあオレンジジュース」
スタッフ「オレンジジュースですね。かしこまりました」

スタッフ去る。

由麻「体調は問題ありません」

真矢「そう。よかった。みなさんの仕事って車載バッテリーですよね？」

由麻「・・・あの、なんですか？話って。体調は問題なくとも、その、あまり遅くなるのも」

真矢「わかりました。では単刀直入に言います」

由麻「あはい」

真矢「松川電器の技術部に向向してもらえないでしょうか」

由麻「え？」

真矢「異動のお願いです。もちろん大下さんの意向もあるもので、断ることもできますが、私としてはぜひ大下さんに来てほしいと思っています」

由麻「異動？こんなところでそんな話・・・ちよつと、ビックリしました。松川電器に向向って。え？なんなんですか？」

真矢「はい。ここで話をしていることはすいません。社内だと周りの目がありますから。それに一刻も早い方がいいと思います、こんな時間ですが、直接大下さんと話をしたかったんです。できれば1週間後か2週間後にはうちに来てほしいと思っています」

由麻「それは急ですね」

真矢「大下さんのキャリアパスを考えれば、今ここで別会社に籍を置くというのも、いい経験になると思います」

由麻「でも私、あと2ヶ月で産休に入るんですよ。迷惑かけちゃうと思うんですが」

真矢「2ヶ月あれば充分です。大下さんのスキルがあれば。そう思っています」

由麻「失礼ですが、さつきから何を言ってるか理解できません。そんな無駄な人事、非効率ですよ。松川電器らしくない。え？2ヶ月あればって、私に何をやらせたいんですか？」

真矢「はい。これです」

と言って開発依頼書を目の前に置く。

由麻、それを見て唖然とする。

真矢「よくご存じの案件です」

由麻「野間リーダーから、散々愚痴を聞かされました」

真矢「PBのバッテリー開発を大下さんをお願いしたいんです」

由麻「え？え？それってつまり、」

真矢「元々山東電機の開発案件です。であれば山東電機社員がやるのが筋だと思いませんか？」

由麻「宇部課長が自分とここでやります、と答えたそうなんですが」

真矢「ええ。ですから松川電器でそれを請け負うことになりました。技術部からも快諾してもらっています」

由麻「だったら、」

真矢「だから大下さんに来てほしいんです。松川電器の技術部で（依頼書）これをやってほしいんです」
由麻「とんでもないと言いますね」

真矢「だから松川電器は世界一の企業になったんです・・・仕事で最も重要なことは適材適所の人事である」

由麻「ジャックウエルチ」

真矢「はい。世界一有名な経営者ジャックウエルチが言った言葉です。当たり前ですが、重みが違う。私たち人事部にとっては神のような存在です」

由麻「そんなこと言われても・・・野間リーダーが断ったこれを私が？できません」

真矢「なぜ？」

由麻「え？なぜって、それは、その」

真矢「尊敬する上司を裏切ると思うから？」

由麻「・・・」

真矢「それとも・・・大下さんもやりたくない仕事はやりない主義？」

スタッフ「がやってくる。」

スタッフ「オレンジジュース、お持ちしました」

由麻「・・・」

真矢「ありがとう。そこに置いてください」

スタッフ「はい」

スタッフ、オレンジジュースを置いて去る。

真矢「大下さんもやりたくない仕事はやりたくない主義？そんなことないですね？大下さんはそういうタイプじゃない」
由麻「・・・」

真矢「異動に納得してもらえらるんであれば、大下さんをプロジェクトリーダーにしようと思っています」

由麻「リーダー？私が？」

真矢「はい。クラスアップの大抜擢です」

由麻「私が？リーダー？」

真矢「大下さんならできます。ゆくゆくは山東電機を背負って立つ人材だと思っていますから」

由麻「そんな無理ですよ。私には」

真矢「無理だと思ったら無理です。でも無理じゃないと思って挑戦することも時には必要です。大下さんならできます」

由麻「・・・」

真矢「それから次世代電池事業部の次の部長なんですが、」

由麻「え？次？え？・・・広重部長は？」

真矢「鈴木副部長にお任せしたいと思っています」

由麻「え？」

真矢「来月には鈴木部長の誕生です。野間リーダー、蔦サブリーダーの信頼も厚い。私は適材適所だと思っています」

由麻「・・・」

真矢「それでも大下さんは、次世代電池事業部に残りたいですか？」

由麻「・・・前向きに検討します」

真矢「いい返事を待ってます。大下リーダー」

由麻「・・・」

真矢「ではお身体、お大事に。失礼します」

真矢、伝票を持って帰る。

由麻、オレンジジュースを一気飲みする。
そして咽る。やがて決意したように帰る。

【シーン6 オフィス】金曜日

朝。朱美が開発室から入ってくる。
疲れている。徹夜だったようだ。

コーヒーを持ってテーブルへ。

そこに薫がデスクからやってくる。

薫「トイレで宇部課長に会いました」

朱美「え？もう？（壁時計を見て）6時半に？早すぎない？」

薫「はい。それで私たち3人が朝までいたことを伝えたら、
ちようどよかった、だったら少し話をさせてくださいと言
われました」

朱美「話？」

薫「はい。何の話かわかりませんが」

朱美「まあ、こっちはちようど一段落したからいいけど・・・
でもなんか都合よすぎない？」

薫「どういう意味ですか？」

朱美「だってこの時間でしょ？まるで私たちだけに話がある
みたい」

薫「徹夜だつてこと知ってたんですかね？」

朱美「さあ。でもきつと広重部長、中野副部長がいたら都合
悪い話なんですよ」

薫「ああ、そういうことですか」

野間が紙を持って開発室から入ってくる。

野間「これ見てください・・・粒径制御することで理想的な
レート特性が見られました。温度25度において約23%
の向上です」

朱美「理論値にはまだ遠いけど、いい傾向ね。今度は温度を
変えてみましょう。チタン酸ナトリウムの低温合成、もう
少し追加してくれる？」

野間「わかりました。つてことは明日も出社ですか？」

朱美「当然。土曜日だけいい？」

野間「今が踏ん張り時です。むしろ休みなんていりません」

朱美「何言ってるの。三六協定の範囲内で仕事はしましょう」

野間「わかってます。鈴木副部長に迷惑は掛けません」

朱美「お願いね」

野間「はい。（薫に）チタン酸ナトリウム、この後、用意し
といてくれ」

薫「・・・」

野間「薫サブリーダー？」

薫「ああわかった」

野間「・・・明日なんかあったのか？」

薫「いやそうじゃない」

野間「家族サービス、優先していいぞ。俺がやっとくから」

薫「だからそうじゃない。出るよ俺も」

野間「なんだよ？疲れたのか？」

薫「・・・お前は本当にいつつつも我関せずだな」

野間「は？」

薫「今ここで何が起こっているのか、ホントに関心ないの
か？」

野間「あるに決まってるだろ」

薫「あるのか？」

野間「チタン酸ナトリウムを粒径制御することで、エネルギー密度が向上するんだ。関心ないわけないだろ」

しばし間。

薦「幸せだよ。お前は」

野間「なんだよ。それ」

朱美「宇部課長が私たちに話があるそうよ」

野間「え？宇部課長？なんですかそれ？」

宇部、デスクから入ってくる。

宇部「お早うございます」

3人、立ち上がりながら、

3人「（口々に）お早うございます」

宇部「ああいよいよ。座ってください。お疲れでしょうから」

朱美「（座りながら）宇部課長こそ、こんな朝早く。どうしたんですか？」

宇部「皆さんに大事な話をしたいなと思ひまして。はい」

朱美「大事な話？」

野間「それは後でってわけにいきませんか？」

宇部「後？」

野間「例の実験で徹夜しました。3人とも疲れてます」

宇部「そうですよね」

野間「それにもうすぐ広重部長、中野副部長も出社します。大下もいないし。揃ってからの方がよくないですか？二度手間になるし」

宇部「なるほどですね」

朱美「野間リーダー。宇部課長がこんな朝早くに來た意味。もう少し考えて」

野間、壁時計を見る。

そして朱美、薦の顔を見る。

宇部「お疲れのところすいません。今ここで話しをすることが、一番いいと思ったものですから」

野間「・・・」

宇部「ありがとうございます。なぜ私がこの話を皆さんだけにするのか。それは、皆さんにぜひ理解してほしいと思うからです。松川電器の経営陣が考えていること。そしてこの次世代電池事業部の未来についてです」

SE（太鼓の音）

ひと通り話が終わった20分後。

宇部「今、お話ししたことは内々示だと思ってください。予定では1週間後のボード会議で決済されます。そこで初めてオープンになりますので、ここだけの話、ということでご理解ください」

朱美「わかりました」

薦「大下も出向ですか」

野間「痛いなそれが」

薦「それに松川電器から5人もくるんですか。5対3って、ここはもう山東電機じゃない」

宇部「そう悲観的に考えなくてください。松川電器と山東電機の融合です。この部署がそのモデルケースになるんです。お互い、協力し合って頑張りましょう」

薦「・・・」

朱美「広重部長は納得するでしょうか？」

宇部「わかりません。ただ、この会社にしがみついても、いいことはないような気がします」

朱美「残酷ですね」

宇部「すいません。正直、私も何が正解なのかわかんないんです」

薦「正解とかそういう問題じゃないでしょう。人の人生が掛かってるんですよ」

宇部「そうですね」

朱美「止めなさい。宇部課長に当たってもしょうがないでしょう」

宇部「いえ、大丈夫です。そういうことも含めてケアしていくのが私たちのミッションですから」

野間「確かにこんな話、みんながいたらできませんね」

薦「野間はなんとも思わないのか？」

野間「何がだよ？」

薦「広重部長がリストラされたり、中野副部長がカスタマーセンターに飛ばされたり、大下が松川電器に取られたり、この部署の8分の5が松川電器になることだよ」

野間「それに2人の昇格もか」

薦「そうやってまたはぐらかす」

野間「仕方ないだろ。親会社が決めたことだ」

薦「仕方ない、か」

野間「は？」

朱美「ちよっと」

野間、PC机に移動する。

薦はそれを苦々しく見ている。

宇部「私の叔父が西谷屋で常務執行役員やってまして」

朱美「西谷屋って、ベビー用品の？」

宇部「はい。ベビー用品全国チェーンの・・・そこが今、定年したメーカーの技術者を積極的に採用してるんです」

朱美「へえ。そうなんですか」

宇部「はい。西谷屋も自社でベビー用品を開発してるんです。いわゆるPBです」

朱美「へえ」

宇部「広重部長がよければ、叔父に口を利いてもらおうと思ってます」

朱美「西谷屋にですか？」

宇部「ええまあ、よければですけど」

朱美「広重部長がベビーカーを？想像するだけで笑っちゃうわね」

宇部「広重部長なら西谷屋に貢献できると思います」

朱美「ゴルフに行く回数、減るわね」

宇部「行くことになれば、そうなりますね」

朱美、立ち上がり深々と頭を下げる。

朱美「広重部長を何とぞよろしくお願いします」

宇部「はい。私にできることであれば・・・あ、今の話、山崎には言わないでください。この仕事に同情は禁物ってまた怒られますから」

朱美「・・・わかりました」

宇部「それで、あの、徹夜明けのところ申し訳ありませんが、この後一緒に松川電器に来てもらえませんか？」

朱美「松川さんに？」

宇部「はい。ここに送り込む5人の選抜について相談したいんです」

朱美「・・・」

野間「いいですよ。ここは任してください」

朱美「ありがとう。（宇部に）じゃあ」

宇部「すいません。ではタクシーで一緒に行きましょう」

朱美「はい。（2人に）じゃあよろしくね」

2人「口々に」はい」

宇部、朱美、松川電器に向かう。

2人のギクシャクした間がある。

野間「副部長昇格おめでとう」

薦「トゲがあるな」

野間「ないよ。素直にそう思ってる。俺に管理職は無理だ。さすが松川電器、よくわかってる」

薦「野間。PBのバッテリー開発、仮に松川が引き受けなかったら、どうした？会社の言うこと聞いたか？」

野間「うん・・・どうかな」

薦「やっぱ断るか？」

野間「たぶんな。そんなことに時間を割く意味が俺にはわからん」

薦「意味ね」

野間「意味が分からないのに、やる意味がわからん。なんか変なこと言ってるか？」

薦「その信念、理解はできるが間違っている」

野間「そうか？」

薦「そうだ。やりたくない仕事でもやらなきゃいけないのが会社のルールだ。会社に雇われてる以上、会社の言うことに従うのは当然だ」

野間「俺は別にやりたくないとは言っていない。今、やりたくないと言っただけだ。車載バッテリーの開発で忙しいときに、なんでPBをやらなきゃいけないのか意味がわからんと言っただけだ」

薦「そう言うことも含めて上は判断したんだ。今、やるべきは車載バッテリーじゃなくて、PBバッテリーの開発だ」と

野間「その上の考えが正しいとなんでわかる？PBで日銭稼いでも山東は復活しない。少し寿命が延びるだけだ。やがて死ぬ運命なら、そんなことに時間を掛けちゃいけない。

もっと先を見て判断するのが上に立つ人間じゃないのか？」

薦「いつからお前は経営者になったんだ？そういう考えもあっていい。否定はしない。でもさっきから言ってるように、それも含めて考えた役員の結論だ。下はそれを否定しちゃいけない。いや否定するだけならいい。心の中で。でも断るのはお門違いだ」

野間「それが理解できない。心の中で否定するのはよくて、なんで断るのはお門違いなんだ？」

薦「役員命令だからだ。上司の命令を断るなんてことを下はしちゃいけない。組織の一員である以上、当然のことだ」

野間「理解できる命令なら俺だって聞く。ただ今回の命令はともじやないが理解できなかった。なぜか？今、世界中でリオンバッテリーの開発を競争している状況だ。言うまでもなく山東電機もそのレースに参加している。そしてラッキーなことに俺たちは先頭を走っている。そんなこと薦に言うまでもない。なのになぜ自らそのレースを棄権しなきゃいけないんだ？まっつっつた意味が分からん」

薦「レースをする体力がなくなってきたからだ」

野間「体力を蓄える時間を作って1位を諦めるくらいなら、このまま走った方が1位になるチャンスがある。この世界、1位にならなきゃ意味がない。俺はそのつもりで開発に全力投球してきた」

薦「それは経営からしたらギャンブルだ」

野間「・・・宇部課長にも同じこと言われたよ。俺のやってきたことはギャンブルだと」

薦「経営はギャンブルじゃない。確実に生き残ることがすべてだ」

野間「その確実に生き残る方法こそが車載バッテリーの開発だと俺は言ってるんだ。営業はそれをわかっているじゃない」

薦「村上専務だって苦渋の決断をしたに決まっている。俺たちはその想いを汲み取るべきだ」

野間「そういうことなけれ主義がこの会社をダメにしたんじゃないのか？」

薦「違う。逆だ。俺たち開発陣が力を持ちすぎたんだ。営業や事業部の言うことを聞かない開発陣の開発したモノなんか売れるわけがない」

野間「それはそうかもしれない。確かにうちのコンシューマー製品はひどい。赤い洗濯機なんか売れるわけがない。でも俺は違う。使える製品だけを作ってきた」

薦「確かにそうだ。野間が開発したリオンバッテリーは画期的なものばかりだ」

野間「だろ？だから俺は」

薦「だからそれがわがままだって言うんだよ」

野間「え？」

薦「自分だけは違うとか、思い上がりもいい加減にしてくれ」

野間「なんだよ、薦」

薦「・・・今まで俺は野間に従ってきた。正直、疑問に思うこともあった。もう少し広重部長の言うことも聞いた方がいいんじゃないかなーとか。それでも俺は何も言わなかった。それは野間が俺の上司だからだ。同期とは言え、上司の言うことだから素直に従う。サラリーマンとして当然のことをしてきた、つもりだ・・・結果、評価はすべて野間敏也のもの。俺は単なるサポートスタッフ。天才野間敏也の日陰・・・ハイミの話もそうだ。ハイミは俺が必要なんじゃない。野間が必要で、その野間を引き抜くために俺を餌にする。俺だってエンジニアの端くれだ。プライドだっである。でも現実には、野間の、マネージャーだ。エンジニアですらない。広重部長も野間を説得するのに俺に言ってくる。俺が野間のマネージャーとしか見られてないからだ」

野間「何言ってるんだよ」

薦「それでも俺は我慢した。リーダーを支えるのがサブリーダーの仕事だから。でもこれからは違う。俺は副部長で前はリーダーのまま。俺はお前に命令をする立場だ・・・いいか、もしかた上からPBバッテリーの開発をやってく

れと言われたら、俺は何が何でもお前にやらせるつもりだ。それが俺の役割だから。同じ状況でもし断ったら容赦はない」

野間「・・・そっか」
薦「ああ」

しばし間。

薦「広重部長も、中野副部長も、大下も、俺は犠牲者だと思ってる」

野間「なんだよ？犠牲って」

薦「野間敏也を管理できなかった結果だ」

しばし間。

野間「わかった。これからは薦に従うよ」
薦「ありがとう。頼りにしてる」

【ラウンジ】 金曜日

スタッフ「（袖から）いらっしやいませ」

典子が入ってきて椅子に座る。
専門書を読みだす。

【オフィス】 金曜日

野間、デスクに向かう。

野間「2、3時間、仮眠してくる」

薦「いや、どうせ今日はチタン酸ナトリウムを低温合成するだけだ。俺ひとりでもいい。今日は帰った方がいいんじゃないか」

野間「帰ってこの時間に？会社休めてことか？」

薦「そう。代休のこともある。明日はひたすら実験だろ。体力回復を優先してくれ。じゃないと走れなくなる」

野間「レースを棄権しないために休めってか？」

薦「その通り」

野間「わかったよ。未来の副部長に従います。じゃあお言葉に甘えて。また明日」

薦「ああ、また明日」

野間、退社する。

薦、苦悶の表情を浮かべる。
がやがて意を決して開発室へ。

【シーン7 ラウンジ】 金曜日

その日の夕方。

スタッフ「（袖から）いらっしやいませ」

野間が両手に大きな紙袋を持って入ってくる。
その後ろをスタッフが付いてくる。

野間「待った？」

典子「ううん。何それ？」

野間「パチンコの景品」

典子「え？パチンコ？え？仕事は？」

野間「うんまあ今日は早退」

典子「え？なに？じゃあなんでわざわざここに呼び出すの？」

野間「うちに帰ると、決心が鈍りそうだから」

典子「え？なに決心って？」

野間「ああ、えっとなんにする？俺は・・・ホット」

典子「じゃあ私はペリエ」

スタツフ「ホットコーヒーとペリエですね？」

2人「それぞれ」はい」

スタツフ「かしこまりました」

と言って去る。

典子「なに決心って？」

野間「うん・・・（紙袋から玩具のロボット）あ、これ景品」

典子「またロボットの玩具。もう置くとこないよ。うち」

野間「どっかあるだろう。この一休くらい」

典子「ええ？」

野間「玄関の棚とか」

典子「じゃあトイレの棚ね。これは」

野間「え？」

典子「なに？」

野間「わかりました」

典子「・・・で、なんなの決心って？」

野間「実は、あの、うん・・・山東電機、辞めようと思って」

典子「辞める？え？なんで？」

野間「まあ上司と喧嘩して」

典子「え？たったそれだけで？」

野間「たったって。ダメかな？」

典子「ダメに決まってるでしょう。なに甘ったれたこと言ってるの？」

野間「まあそうだよな」

典子「上司なんて陰で悪口言つときやいいのよ。喧嘩とかするの？アホ」

野間「アホか。まあ、アホだな」

典子「まあ私も人のこと言えないけど」

野間「そうだよ」

典子「あんなに山東電機のこと、好きだって言ってたじゃない」

野間「（涙をこらえる）ああそうだな」

典子「初めて買ってもらった玩具の電池がSANTOだったんでしょ」

野間「うん」

典子「動いて驚いたって言ってたけど、電池で動くの当たり前だから」

野間「うん」

典子「普通、そういう体験したら玩具メーカー目指すもんだけど、電池を作りたいって、わが夫ながら、あんた変わってるわ」

野間「ごめんな変人で」

典子「電池は世界の心臓なんですよ？」

野間「ああ」

典子「だったらもうちょっと頑張ってもいいんじゃない。辛いことあるよ。会社だもん」

野間「ごめんな変人で」

典子「電池は世界の心臓なんですよ？」

野間「ああ」

典子「だったらもうちょっと頑張ってもいいんじゃない。辛いことあるよ。会社だもん」

野間「ごめんな変人で」

典子「電池は世界の心臓なんですよ？」

野間「ああ」

典子「だったらもうちょっと頑張ってもいいんじゃない。辛いことあるよ。会社だもん」

野間「その、世界の心臓を作るっていう夢を、俺は何としても叶えたいんだ」

典子「うん、いいじゃん」

野間「それは山東電機じゃない」

典子「え？」

スタッフが入ってくる。

スタッフ「ホットコーヒーとペリエ、お持ちしました」

スタッフ、飲み物をテーブルに置く。

固まったままの2人。

野間、胸ポケットから離婚届を出す。

典子、目の前のペリエを野間に掛ける。

怒って帰る典子。

ペリエなのか涙なのか顔が濡れた野間。

泣いているのか肩を震わしている。

【オフィス】土曜日

薫が開発室から出てくる。

紙切れを持って何やらノートに書き込んだり。

そこに朱美が入ってくる。不安そうな顔。

朱美「ねえ」

薫「ああ、おはようございます」

朱美「おはよう」

薫「いい感じの数値です。すぐ始めますか？」

朱美「うん。ねえ？」

薫「はい？」

朱美「野間リーダーは来てる？」

薫「いえ。まだ見てませんが」

朱美「そう」

薫「どうしたんですか？」

朱美「彼の机に何も無いのよ」

薫「え？」

朱美「綺麗に片付いてるの」

薫、血相を変えてデスクへ向かう。

朱美、スマホを取り出し、電話を掛ける。

呼び出し音が劇場に響く。

【シーン8 ハイミ】一年後

ここはハイミのオフィス。

チャンが椅子に座っている。

電話が鳴っている。

チャン「（電話）はい。チャンです・・・何を腰抜けなこと

言ってますか。やるからには一番を目指さなければいけま

せん。今が天の時なんです・・・ワン、成功する三つの目、

知ってますか？・・・従業員を見る目、顧客を見る目、そ

して当局の産業政策を見る目のことです。今、当局は電気

自動車の開発に力入れています。今やらなければいつやりますか？・・・明後日まで結果出してください。出さなけ

ればワン、あなたは首です」

チャン、電話を切る。

チャンの電話中に入ってくるレイと薫。

レイ「チャン、松川電器の部長です」

チャン「おお、松川。待ってましたよ」

薫、名刺を出しながら、

薫「初めまして。松川電器の薫です」

チャン「(名刺を出しながら) こんにちは。ハイミのチャンです。(椅子を勧めながら) どうぞどうぞ」

薫「ありがとうございます」

チャン「あなた、中国語、上手ですね」

薫「はい。ハイミと業務提携する以上、中国語が必須と考えまして」

チャン「ハハハハ」

レイ「ジアン、呼んできます」

チャン「はいはい」

レイ、退室する。

チャン「松川電器、リチウムイオン電池の開発、諦めましたか？」

薫「いえ、そういうことじゃありません。ただハイミの開発スピードに付いていけなくて、であれば手を組んだ方がいいんじゃないかと、うちのトップの判断です」

チャン「ハハハハ」

薫「何か秘訣があるんでしょうか？ここ3か月における立て続けの製品発表は尋常じゃない」

チャン「秘訣？・・・そうですね。強いて言えば、人です」

薫「人？」

チャン「そう。会社は人でできています。だから優秀な人を集めれば、優秀な会社になる。子供でもわかる算数です」

薫「優秀な人・・・そうですね」

チャン「1年前、とても優秀なエンジニアに入ってもらいました。ジアンと言います」

薫「ジアン？」

チャン「はい」

レイ、野間を連れて入ってくる。

薫、野間を見て仰天する。

野間は平然としている。

チャン「ああ、ちょうど来ました」

レイ「ジアンミンイエ。ハイミのトップエンジニアです」

チャン「ジアン、この人、(名刺を見ながら) 松川電器の薫。

これから色々お世話することになります。仲良くしなさい」

野間「はい」

薫「野間だよな？」

野間「(名刺を出しながら) 初めまして。ジアンです」

2人、名刺交換をする。

暗転。

幕